

# 日本語オノマトペ語彙の語源について

## An Etymological Study of the Japanese Onomatopoeia Lexicon

角 岡 賢 一  
KADOOKA Ken-Ichi

### キーワード

[境界オノマトペ] Boundary Onomatopoeia · [擬似オノマトペ] Pseudo-Onomatopoeia

[かな擬似オノマトペ] Kana Pseudo-onomatopoeia · [語源] Etymology

[逆成] Back Formation

### 1. はじめに

オノマトペとは、語源的に自然界の音や、人間を含めた生物の発した音声を直接模した擬音語、あるいは本来は音声を伴わない抽象的な様態を間接的に描写した擬態語を指している。例えば、「おぎゃーおぎゃー」「けたけた」というような人間の音声、「わんわん」「にゃーにゃー」などの動物の音声や「かたかた」「きーきー」という自然界の物音を模したものは擬音語であり、「ぐたぐた（する）」「のらりくらり」などは擬態語と分類される。

日本語のオノマトペ語彙は典型的には、名詞や動詞などとは異なる独自の語源を持っている。擬音語については、語源は明確である。擬音語は、実際に発せられた音を模したものだからである。擬態語は、様態を表現しているので、語源と表現形式の関係は擬音語よりも稀薄である。従ってオノマトペとして語源が問題になるのは、擬態語に関してであろう。擬態語の語源を辿ってみて、動詞・形容動詞などの統語範疇から派生した語は、本論文では純粋な分類としてのオノマトペとして扱わない。例えば「はるばる」「ほのぼの」という語はそれぞれ、「はるかだ」「ほのかだ」という形容動詞の語幹の一部を反復することによって形成されている。このように語形成の過程を辿ることができる語彙は「真正」オノマトペ（第3節参照）として扱わない、という趣旨である。

本論文での「オノマトペ」という用語は以下で特に断らない限り、擬音語と擬態語の両方を指すものとする。擬音語を擬音語と擬声語に、擬態語を擬容語・擬情語・擬態語に下位分類している場合もある（Kakehi (1981)）。しかし本論文においては、擬音語・擬態語という区分以上に細かく分類する必要がない限り、この2つの区分にとどめておく。その理由は、第一に本論文の主要な目的が、日本語オノマトペの語源を遡及することである。第二に角岡（2003）でも示したように、日本語オノマトペの語彙は擬音語と擬態語両方に使われることが多く、細かく分類すると、目的によっては却って分析が複雑になる可能性があるということである。例えば、「どたばた」という語は、足音や騒いでいる物音を描写していると同時に、足音を立てて歩き回っている様態や、騒いでいる様子をも表現している。この類の語は、こ

のような意味で擬音語にも擬態語にも分類できるであろう。上のような理由で、本論文においては、あるオノマトペ語彙が擬音語であるのか擬態語であるかということは、必要がある場合に区別することとする。

日本語においてオノマトペ語彙は特徴ある位置を占めている。<sup>1</sup> 日本語の母語話者としては無意識に日常的にオノマトペ語彙を用いて生活をしているが、日本語以外を母語とする話者からみた日本語オノマトペの語彙について、Herlofsky (1990:213) は “Translating the Myth: Problems with English and Japanese Imitative Words.” と題した論文の中で、次のように述べている。

(1) ... that Japanese imitative words are so subtle, complicated, and numerous, that they are nearly impossible for non-Japanese to comprehend, and next to impossible to translate into other languages.

当該論文の題名からも窺えるこのような「神話」に対してこの小論では、日本語オノマトペ語彙は体系的にとらえることができ、その規則性・体系性が把握できれば習得するについて却って要になるということを示す。そのためには、Kakehi (1981) で提示されたような「語彙化の程度」という枠組みを援用する。

次節で語彙化の程度を定義し、次に「境界オノマトペ」として個々の語彙項目について語源を検討する。さらにオノマトペ語彙を区別するための前提として「オノマトペ的語感」の定義を行う。また、オノマトペ語彙と一般語彙の区別の目安として「連濁」が重要な基準となることを示す。

## 2. 語彙化の程度

一口にオノマトペ語彙といっても特定の時代において、その語彙化の程度はさまざまである。本節ではオノマトペ表現の語彙化の程度を、統語範疇と関連させて検討する。

日本語と英語のオノマトペ表現の語彙化の程度について、Kakehi (1981) が4段階に分類している。田守 (1991) は、4段階の区分を基本として、前者の定義を一部分修正している。ここでは、後者の定義に従ってオノマトペ語彙を4つに区分する。このような枠組みを援用するのは、日本語母語話者がどの程度語源を意識しているかという尺度と関連づけるためである。語彙化の程度が低いほど一般語彙から「浮き上がって」おり、語彙化の程度が高いと分類されるに従って一般語彙に「埋没」していく、と考えるのである。最も語彙化の程度の高い部類は、辞書などで語源を確認しない限りオノマトペが語源と意識しないものと思われる。

語彙化の程度が最も低いレベル1の語彙は、臨時語 (nonce form) である。臨時語とは多くはその場限りの用法であり、一般に使用が拡大されて辞書に載るようになるまで定着する語は極めて少ない。毎年夥しい数の流行語が現れては消えてゆくが、そのうちの擬音語・擬

\*1 McCawley (1968)が指摘したようにオノマトペは語彙階層として、やまとことば（本来語）と音韻的振る舞いなどにおいて差を示す。

態語の類をこのレベル1の臨時語と考えて差し支えなかろう。覧（1993:140）が次のような例を挙げ、映画の宣伝文句として（a）の「ガビューン」については当該語彙の出現直後から「余命はいかほどであろうか……」と訝っていたが2003年から振り返ると、跡形もなく消え失せたようである。しかし同じように流行語として出発しながらも（b）の「きゃぴきゃぴ」は生き残ったように思われる。逆にこの語が修飾する「ギャル」の方は、ある年代の話者にとっては死語に近いかも知れない。<sup>\*2</sup>

- (2) a. ガビューンと日本上陸 カーリ・スー  
b. きゃぴきゃぴ（ギャル）

「きゃぴきゃぴ」が十年余りの命脈を保っているとすると、レベル1からレベル2への移行途上にあると考えられる。

また流行語ではないが、辞書に収録されるほど語彙として定着しているのでもない、という中間的な地位にある場合も考え得る。例えば「ざざざざっ」という語は現在日本語として定着しているとは言えないであろうが「地面を滑っていく音の描写」と説明すれば、その様態が想像できるものと考えられる。

さらに、文学作品において作家によって独自に用いられるオノマトペ語彙の用法もある。宮沢賢治の「ギーギーフー」「どってこどってこ」は、日本語としては全く新しい創作である。同じく宮沢賢治の「星がペかペか光る」という例も、「ぴかぴか」と同じ様態を表現していて音形も近いが、例外的な用法に属する。「ペかペか」と「ぴかぴか」では、語基「ペか」と「ぴか」の第1母音が異なっているだけである。このようなオノマトペ語彙の独自の用法は、作家の文体となっている。上に挙げた宮沢賢治の例についての詳細は、覧（1993）を参照されたい。

レベル2には多くの日本語のオノマトペが含まれる。このレベルの語彙は、助詞の「と」を義務的に伴う。同じレベル2でも、語彙化の程度が低いのは「鶏がコケコッコーと鳴く」「ギヤーと悲鳴をあげる」の「コケコッコー」や「ギヤー」である。これらはそれぞれ、鶏の鳴き声と人間の叫び声を描写する擬音語であり、引用でなければ用いられない形である。助詞「と」がないと、「\*鶏がコケコッコー鳴く」「\*ギヤー悲鳴を上げる」というように非文になってしまう。

レベル3の語は、「する」「だ」「～になる」などが後続して、全体として1つの語として機能するものがある。さらにこのレベルの語には、「と」を随意的に伴うもの、助詞「と」を伴なわず単独で用いられるもの、結果を表わす助詞「に」を義務的に伴う語が含まれる。「と」が随意的である例としては、「とぼとぼ（と）歩いていった」の「とぼとぼ」を挙げができる。「と」を伴わない場合として例えば、「病気がすっかり（\*と）治った」というときの「すっかり」がある。この語は、「と」がつくと非文法的になるということから、語彙化の程度がかなり高いと言うことができる。「に」を伴うオノマトペは結果を表わしており、「語彙

\*2 この当時の「ギャル」という用例は、十代後半から二十代前半の年代の女性を指していた。21世紀初頭の現在、当該年代の女性たち自身は自分たちのことをこのように表現しないであろう。そういう意味において「ギャル」という表現は、ある一定年代の話者にのみ共時性を伴っていると考えられる。

化の程度も高く、語彙として安定している」と田守（1991:122-3）は述べている。例えば、「ずたずたに引き裂く」というときの「ずたずた」は、引き裂いた結果の状態を表現している。

最後のレベル4は、オノマトペ語彙に基づく各種の派生語である。動詞として用いられる語を例にとる。「～する」という動詞語尾に先行する場合は、「びっくりする」「かっか（と）する」などのように、オノマトペ語彙そのままの形の後に「する」が付けられる。オノマトペ語彙から動詞を派生する語尾で「する」以外のものは、「～つく」「～めく」「～ける」「～る」という類のものである。これらの動詞語尾に接続する現代語のオノマトペは、2モーラの語基で反復形のあるものに限る。例えば、「べとつく」「ゆらめく」「いじける」「ごてる」という動詞形は、それぞれ「べとべと」「ゆらゆら」「いじいじ」「ごてごて」という語形の元となるオノマトペ語基「べと」「ゆら」「いじ」「ごて」から派生していると考える。これらの語類ではオノマトペ語基に「復元」することによって、容易に語源を辿ることができる。

ここで例証として、擬態語「くねくね」と動詞「くねる」の語源を検証してみよう。いずれが語源となって他方が派生されたかという議論は後に回すこととする。『日本国語大辞典』では「くねくね」の語源については説明がなく、「くねる」については以下の四説が紹介されている。

- (3) 一. クリネル（繰練）の義〔和訓栞・大言海〕。
- 二. クはクネ（牆）、クロ（畔）などのクと同根で、回の義から出たもの〔国語の語根とその分類=大島正健〕。
- 三. 節だつさまをいうククミ（勾）ナレルから。クはクタの反、ネはナレの反〔名言通〕。
- 四. 空念ラス<sup>3</sup> からか〔名語記〕。

四説いずれとも実詞に語源を求めている。もしこのいずれかが真で、「くねくね」からの逆成ではないとすれば、「くねくね」は動詞「くねる」から派生した境界オノマトペ、という結論が得られるかもしれない。ここでは結論は差し控えておく。

レベル4の語彙で古い時期に形成された動詞では、「おどろく」「すする」「とどろく」のようにオノマトペであるという語源を、母語話者としても共時的にほとんど意識しないような語も多い。そういう語は、オノマトペ表現のなかでも語彙化の程度が最も高いものである。そして、上の「2モーラ語基の反復形がある」という基準からは外れている。これらの語は、音形という点からは現代語と差ができるてしまっているのである。「おどろく」「すする」「とどろく」という動詞は、「べとつく」「ゆらめく」「いじける」という動詞よりもオノマトペ的語感が弱いと感じられる。それは、後者の動詞は語幹「べと」「ゆら」「いじ」を反復することによって「べとべと」「ゆらゆら」「いじいじ」というオノマトペ語彙が形成されるのに対して、前者の動詞にはそのようなオノマトペ語彙の派生ができないということによって検証さ

\*3 訓じ方は辞書に示されていないが、「空念ラス」で「くねらす」との意図であろうか。他の三説の語源に比べると、名詞のように映る「空念」に「らす」という語尾を付さなければならない点で信憑性に乏しいという印象を受ける。

れる。

レベル4に属するある種の動詞において子音各音素の音象徴性は、現代語とも共通する部分がある。例えば、「すする」という動詞における子音音素/s/は、人間が液体を吸い上げるときの音を模していると考えられる。音素/s/の象徴性は、現代語のオノマトペで液体を吸い上げる様態を表現する「ずずっ」と共通するものがある。「ずずっ」においては/s/の有声化された/z/が用いられており、音が大きいということを表現している。「すする」は、液体を吸い上げる音を模して動詞としたが、現代語では「ずずっ」という形で副詞として用いられている。

レベル4の語で特に語彙化の程度の高いものは、語源的にオノマトペであっても語が形成されて長い時間が経過し、現代における他のオノマトペ語彙との音形的パターンが大きく異なっている。現代の母語話者は、「そそぐ」「すする」などの語を、共時的にオノマトペであると意識しなくなっている。その原因として1つには、現代の他のオノマトペ語彙と音形的パターンが大きく異なっているからであると考えられる。現代オノマトペ語彙の典型的な音形は、反復形や、「ん」「っ」「り」がつく形である。例えば動詞については、前述したように、現代語においてオノマトペ起源の語が「する」語尾以外の形で動詞として用いられるためには、語基の反復形がオノマトペ語彙として存在することが前提条件である。

もう1つの理由として、オノマトペ語彙は現代において典型的には副詞あるいは形容動詞として用いられるということが挙げられるであろう。動詞の「おどろく」「そそぐ」「すする」などは、統語範疇という点において現代の典型的なオノマトペ語彙から外れている。第3に、「驚く」「注ぐ」「啜る」などの語には漢字で書かれるものも多いということが挙げられる。典型的なオノマトペは、統語範疇としては副詞や形容動詞であり、仮名で書かれることが圧倒的に多い。従って、漢字で書かれた語彙は直感的にはオノマトペであると考えにくいということが言えるであろう。歴史的な観点からも、漢字の訓読みが確定された時期（中古日本語の平安期）の語型ということになるから、深く日本語語彙の階層にとけ込んでいるということが言える。ある意味ではこれらの語は「オノマトペらしくない」響きのする語類である。

次節では「語彙化の程度」に関連させて、「真正オノマトペ」と「境界オノマトペ」の区分について論じる。

### 3. 境界オノマトペ

日本語においては、ある語がオノマトペであるかそうでないかという判断は、母語話者にとって比較的容易であると角岡（1993b）で述べた。しかし実際には、語源を辿ってみなければ客観的に判断ができない場合がある。それは、音形がオノマトペ語彙のパターンと同一であるか、または近似していることによって、一見オノマトペのように思われる語である。例えば、形容詞や形容動詞の語幹を反復しているような場合は、反復によってオノマトペのような音的効果が得られる。「ほのぼの」「はるばる」という類の語がそれである。このように一般語彙の一部（語幹）を反復することによって恰もオノマトペ語彙であるかのような直感を日本語母語話者にもたらすことについては、第4節で検討する。

角岡（1993b）では、中国語から借入された語を「擬似オノマトペ」と称した。日本語の本来語においても、以下に掲げるよう、語源的にはオノマトペではないが、共時的にオノマ

トペのように感じられる語も、「境界オノマトペ」として分類することに妥当性が認められるものと考える。すなわち「反復」というようなオノマトペ固有のパターンによって、あたかもオノマトペであるかのような一種の音的効果を創出している点において「境界オノマトペ」として分類するのである。もう1つ、語源を意識しなくなっている、もしくは語源が容易に辿れなくなっていることによって音形が典型的なオノマトペのパターンとは異なっていてもオノマトペ語彙のよう感じられる語がある。例えば「たらふく」がそうである。

オノマトペの語彙は、語幹が反復されても連濁しないというのが原則である。「きょろきょろ」「からから」「ちらちら」「しゅっしゅっ」「つんつん」「ひりひり」など、すべて連濁されていない。従って、当該語彙がオノマトペであるかそうでないか語源的に検討するのに、連濁現象を1つの指標として立てることは有効である。連濁については第5節で改めて検討する。

次に、オノマトペのように思われるが語源を調べるとそうではない例を、その理由と共にアルファベット順に挙げる。Kakehi *et al.* (1996) に見出し語として掲げられている語彙を「※」で表示する。以下の語群は包括的に境界オノマトペを列挙しようと意図するものではなく、例示のために掲げるものである。「擬似オノマトペ」とは角岡 (2001b) で定義された語類で、漢語起源の擬態語を指す。「かな擬似オノマトペ」はそのうち、かなで表記されることが多い、そのために漢語起源という語源が日本語話者にとって辿りにくくなっている語彙を指す。

#### ①あべこべ

「あ」と「こ」は共に「あれ」「これ」系列の指示詞である。「あべ」は「彼方」、「こべ」は「此方」からの形ということである。なお、音韻的に共通点のある「つべこべ」は、語源的にオノマトペ起源であるらしい。「つべこべ」はKakehi *et al.* (1996) にも採録されている。

#### ②あいあい

この語は単独ではなく「和氣藹々」の後半部分をなす。「藹々」は「多く盛んなさま」を表すが、「和氣藹々」以外の組み合わせを目にする事はない。「和氣あいあい」と表記されることが多く、かな擬似オノマトペである。しかし「わきあいあい」のように本来の漢字四字がかなに置き換えられることはない。

#### ③あくせく※

前半の「あく」と後半の「せく」で交替形のようになっているが、この語は中国語起源の擬似オノマトペである。漢字では「齶齶」と表記する。中国語の音韻論では、「あくせく」のように各形態素の語末の音が韻を踏んでいる形を疊韻と呼んでいる。疊韻の形は、日本語オノマトペの交替形と音形パターンが同じである。「齶齶」という漢字表記が日本語話者にとってはまず思い浮かばず、やまとことばと思いこんでいるという点で、最も典型的な「かな擬似オノマトペ」である。

#### ④でたらめ

賽子の「目が出たら」というところの「出たら目」というのが語源らしい (『日本国語大辞

典』)。「出鱈目」は当て字である。『広辞苑』も「『め』はさいころの目か」と説明している。

#### ⑤どさくさ

『日本語語源辞典』によると、「佐渡」の逆さことばで「どさ」であるという説と、博打を検挙された現場の混乱のことを「どさ」と言ったという説が併記されている。後者の説が正しいとするとオノマトペ起源である。また後半の「くさ」は、いずれの説の場合でも調子を合わせるためにつけ加えられたものであろう。

#### ⑥ごうごう

(かな) 擬似オノマトペであり、「轟々」という擬音語と「轟々たる非難」という擬態語を挙げておく。「とどろく」という訓読みは、やまとことばとしての擬音語である。擬態語の「轟々たる」という用例においては「たる」という接辞が文語のような響きを伴うが、「轟々」という漢字は連想しにくい。四字熟語としては「喧々轟々」となるが、日常的使用の場面では「侃々諤々」と混用して「けんけんがくがく」などという誤用も見受けられる。

#### ⑦はるばる

形容動詞「遙かだ」の語幹「はるか」の一部「はる」が反復され、連濁したものである。「はるばる」にしても「ほのぼの」にしても形容動詞の語幹(「だ」を除いた語形)は復元しやすく、語源は比較的辿りやすい。

#### ⑧へっちゃら／へいちゃら

「へいちゃら」というのがもとの形である。「へい」は「平氣」の「平」、「ちゃら」は冗談という意味らしい(『日本語語源辞典』による)。『広辞苑』は「へっちゃら」：「へいちゃら」に同じとし、「平ちゃら」という表記も見られる。「へい」から「へー」へという途中の段階があったのか否か疑問である。これが「へっ」と更に変化してしまうと「へいき」という語源への復元は不可能に近いであろう。

#### ⑨ほのぼの

形容動詞「ほのかだ」の語幹「ほのか」の一部「ほの」が反復され、子音/h/が/b/と有声化したものである。連濁によってオノマトペ語源でないということが明らかになるが、反復によってオノマトペ的語感が増している。語基「ほの」からは「ほんのり※」が派生されている。

#### ⑩かくしゃく

この語もかな擬似オノマトペで、漢字表記は「矍鑠」である。かな擬似オノマトペとして「齟齬」に比べると、漢語起源であるという意識は強く残っているように思われる。それは「矍鑠」という字は書けないとしても「年老いても身体共に健康」という意味が伝わり、なおかつ和語にその意味に対応する語彙が見あたらないからである。音形としては中国語の伝統的音韻論の用語で謂う「疊韻」で、日本語オノマトペでは「どぎまぎ」などの「交替形」と

共通している。

#### ⑪かんかんがくがく

これも「かな擬似オノマトペ」で、「侃々諤々」と表記される。「齷齪」に比べると「侃々諤々」は漢語起源であるという意識が強いように思われる。それは「齷齪」が4モーラで、より日本語本来語の擬態語の音形に近いのに対して「侃々諤々」は8モーラで、この典型から外れるためであろう。しかし/k,g/という金属を連想させる音象徴性、反復という形態的特徴から、本来語（やまとことば）オノマトペに相当程度接近していると言える。

#### ⑫からっぽ

形容動詞の「空だ」の語幹「から」に接尾辞の「ぽ」がつき、接尾辞の前に促音が挿入されたものである。接尾辞の「ぽ」は別としても、3モーラ目の促音がオノマトペ標識を連想させる。

#### ⑬こんこん

この音形で現される擬似オノマトペとしては「懇々」「滾々」「昏々」と3種類ある。同一の音形でありながら、表現している様態は相互に懸け離れている。母語話者の直感としてこの3つのうち最も漢字表記に遠いものは、水が流れる様態を描写する「滾々」である。「懇」は「ねんごろ」という訓読みから「懇々と諭す」という連想はつき易いし、「昏々と眠る」も「昏睡」から辿れば、漢語起源であるという意識は残っていると考えられる。しかし「滾々と泉が湧く」という漢字は思いつきにくい。

#### ⑭こうこう

これも擬似オノマトペで、「煌々」「皎々」「浩々」と『岩波国語辞典』には3種類採録されている。このうち「皎々」（白くて明るい様子、「皎々たる月光」）、「浩々」（水面などが広々としている様子）は使用頻度が低い。「眩い様態」を「煌々」と表記する例が、境界オノマトペとして資格を満たすであろう。「煌々と灯りが点っている」というように「と」を伴う方が、「皎々たる」のように「たる」という文語的響きよりも語源意識から遠のくのであろう。

#### ⑮くどくど

形容詞「くどい」の語幹「くど」の反復型である。形容詞「くどい」はそのままの形で通用しているため、「くどくど」の語源は辿り易いであろう。

#### ⑯きゅうきゅう

『広辞苑』によると、ひらかなで表記される擬態語として次の2つの定義が挙がっている。<sup>4</sup>

- 一. ゆとりのないほどに強く詰め込んだり押しつけたりするさま。
- 二. 貧困で暮しに余裕のないさま。

---

\*4 他に擬音語として「靴の革などがきしんで鳴る音」という定義も見られる。

これとは別に漢字で表記されている見出しとして「岌岌」<sup>5</sup> 「汲汲」「急急」と3つ挙がっているが、上記の定義に近いと考えられるのが「汲汲」である（あくせくとして一心につとめるさま）。私個人の意識としては「きゅうきゅう」とかなで表記するよりも「汲汲」の方が実感が籠るように思われる。さらに「窮窮」という用字も上記二の定義から思い浮かぶが、『広辞苑』ではこの見出しへは見受けられない。

#### ⑪まんざら

『日本国語大辞典』などでも語源は確定できていないが、「まっさら」と同系かとの説がある。「まっさら」と同系であるとすると、「まんざら」がオノマトペである可能性は低い。古形「まさら」の2モーラ目に強調のための特殊拍が挿入されるさい、促音は後続する子音が無声である必要があるので「まっさら」となり、撥音である場合は後続子音が有声となるので「まんざら」となる。これは現代に残る「まっさら」と「まんざら」が、古形「まさら」から枝分かれした二重語であると考えた場合の話である。促音／撥音という特殊拍によって後続する音の有声・無声が自動的に選択されるという現象は、音声的なものである。4モーラのオノマトペの語彙にも、同様のことが起こる。

#### ⑫まざまざ※

この語の語源は「まざまざしい」という形容詞である。しかし「正しくの義」という語源も示されている〔和訓栞〕(共に『日本国語大辞典』)。形容詞が語源であるとするとオノマトペには該当しない。しかしKakehi *et al.* (1996) には採録されている。

#### ⑯まぜこぜ

動詞「混ぜる」の語幹と方言形の動詞「こぜる」の語幹を組み合わせた形である。「こぜる」は方言形として『日本国語大辞典』に記載されているが、「理屈をこねる」(福井県大飯郡方言)という意味があることからみても、標準形の「こねる」と関連があると思われる。

#### ⑰まじまじ※

『日本国語大辞典』には語源は示されていないが、「まじりまじり」「まじいりまじいり」も「まじまじ」と共通の定義を掲げている。また「まじりまじり」は動詞「交じる」から派生したと説明している。すると「まじまじ」も動詞語源である可能性が考えられる。この語も「まざまざ」と同様にKakehi *et al.* (1996) に見出しへとして挙げられている。

語基「まじ」を黒田 (1967) の定義する「リ延長強勢擬容語」の語形にすれば「まんじり」となる。この語形は「凝視する様態」としては一般的ではないが、歌舞伎ではこの意味で用いられるという。尾崎紅葉、有島武郎でもこの意味での用例が見られる。

#### ㉑みすみす

動詞「見る」の活用の古形「みす」が反復されたものである。現行の活用体系では「見る」はマ行上一段活用であるが、「みす」では活用形が古いために、其時的に語源がわかりにくく

\*5 「山のたかいさま」「あぶないさま」「動きのはやいさま」という3つの定義が挙げられている。

なっている。

#### ㉒むざむざ※

この語源については『日本国語大辞典』は「メゲシの転」〔俗語考〕としか述べていない。「めげし」から「むざ」への音形変化は前後の隔たりが大きいように思われる。また、「めげし」は動詞の活用形と考えられるが、どのような意味を持ち、どの活用形であるのかも明らかではない。

#### ㉓なみなみ※

この語は「酒を杯になみなみと注ぐ」という用例のように、液体の溢れる様態を表現しているが『日本国語大辞典』の語源説明は「波々の義」〔大言海〕となっている。波動から、更に小次元の液体を描写する擬態語へと変化したものであろうか。

#### ㉔なよなよ※

動詞「萎える」と関連がありそうである。『日本国語大辞典』の語源諸説は次のようにある。

- 一. 萎々しの義〔和訓栄〕。
- 二. 弱々しの義〔国語の語根とその分類＝大島正健〕。
- 三. ナヨはナアエ（吁肖）の義（日本語原学＝林甕臣）。

#### ㉕にこにこ※

この語などは典型的な真正オノマトペと考えられるが、『日本国語大辞典』による語源の諸説は次のようにある。

- 一. ニコはノミカホの反。また、ナヒカホ・ネリケヨの反〔名語記〕。
- 二. ニコニコ（和和）の義。ニコはナメカホ（滑兒）の義〔名言通〕。
- 三. ニカホニカホ（和貌和貌）の義〔言元梯〕。
- 四. 笑いニゴム（和）時の音から〔日本語源＝賀茂百樹〕。

これらの説明にある「ノミカホ」「ナヒカホ」「ネリケヨ」<sup>6</sup>などの義や語源を更に遡らなければならぬが、紙幅の関係などからここではこれ以上立ち入ることを控える。

「にこやか」という形容動詞語基は「にこにこ」から派生したものであろうが、「にこやか」の語源は『日本国語大辞典』では以下のように説明されている。

- 一. 柔児肖氣〔日本語原学＝林甕臣〕。
- 二. ニはナミ（並）の反、コは濃の義〔名語記〕。

#### ㉖のびのび

漢字表記としては「伸び伸び」「延び延び」の2通りある（『日本国語大辞典』）。いずれも動詞「のびる」から派生した語形である。「のび」をオノマトペ語基と仮定すると「リ延長強勢擬容」（黒田（1967））語形の「のんびり」が派生される。オノマトペ語基「のび」は動詞

\*6 『日本国語大辞典』ではこの三語は見出しえていなかった。

「のびる」とではなく、形容動詞「のびやかだ（伸びやか、暢）」を介して関連していると考えるのが妥当であろう。

## ㉗のろのろ※

形容詞「のろい」との関連が考えられる。「のろい」の語源は『日本国語大辞典』で次のように説明されている。

- 一. ヌルシの転〔ねざめのすさび・大言海〕。
- 二. ノロシ（遅然如）の義、またノドオロカシ（長愚閑如）の義〔日本語原学=林甕臣〕。
- 三. ミドロシの略 トロシの転〔松屋筆記〕。

「のろい」の語源についてこれら三説のうちいずれかが真である、あるいは他に実証に語源が求められる、ということになれば「のろのろ」は「のろい」から派生した、という結論に至る。

## ㉘ぬけぬけ※

動詞「ぬける」から派生した語形であろう。『日本国語大辞典』の見出し表記に「抜抜」とある。「間が抜ける」という意味合いから「図々しく」というように意図する様態は変化している。真正オノマトペではないと分類するのが妥当であろう。

## ㉙おどおど※、おずおず※

「おどおど」は「おずおず」から派生したようである。更に「おずおず」は動詞「おず（怖ず）」に語源を持つとされている（『日本国語大辞典』）。そうすると「おどおど」「おずおず」共に、真正オノマトペではない、という結論に至る。

## ㉚おいおい

「おいおいと泣く」における「おいおい」は、泣き声を描写する擬音語であるが、ここで問題にするのは、「そのうちに」という意味のほうの語で、「おいおい連絡します」のように用いる語である。後者の意味では、動詞「追う」の連用形「追い」が反復されたものであると推測される。同じ動詞の活用形である、「追ってお知らせします」の「追って」という言い方と同じ意味になる。

## ㉛おいそれ

呼びかけの感動詞「おい」と、指示代名詞の「それ」が結合した形である。「おい、それ」と気軽に指すことから、「安直に」「手軽に」という意味が派生したものであろう。感動詞が語源となるのは珍しい。

## ㉜おめおめ※

形容詞「おめおめし」と関連している。どちらが元であったか結論を導くには、材料に乏しい。『日本国語大辞典』には、「古辞書」として「文明、伊京、天正、饅頭、黒本、書言」が挙げられている。一方「おめおめし」の用例として『太平記』が引かれている。

### ⑬おろおろ※

形容動詞「愚かだ」の語幹の一部「おろ」を反復した語形である。第1子音がゼロ（即ち、母音始まり）である点が典型的オノマトペ語基から逸脱している。同時に、「愚か」という語源とも連想しにくい。

### ⑭おちおち※

動詞「落ちる」と関連しているようである。『日本国語大辞典』の見出し表記では「落落」となっている。語訳には「落ち着いているさま」とある。オノマトペとしての「おちおちしていられない」などの意味と関連が大きいことから判断して、「落ち着く」という意味での動詞「落ちる」からの派生、という可能性が高い。

### ⑮るる

漢字表記では「縷々」となるが、目にすることは少ない。「縷」は「いと」の意があり、「縷言」「縷述」では「縷々」と同じく「細々として」という様態を表している。かな擬似オノマトペと分類することができる。音韻的には語頭の/r/と、その反復という二重の基準で本来語オノマトペの規範から外れる。

### ⑯しぶしぶ

形容動詞の「しぶい」の語幹を反復したものである。「しぶい」と「しぶしぶ」では、反復に際して音形の変化が小さいので語源は連想しやすい。語幹「しぶ」に有声阻碍音/b/が含まれているために、連濁は起こらない。

### ⑰すったもんだ

この語は漢字で「擦った揉んだ」と表記される。語調はオノマトペ的であるが、語源は動詞の「擦る」と「揉む」から来ているのであろう。従ってこの語もオノマトペとは言えない。

### ⑱たけなわ

漢字表記は「酣」「闌」とあるが、語源は和語に求めているようである。『日本国語大辞典』では次の両説が示されている。

- 一. ウタゲナカバの約〔古事記伝〕。
- 二. タケは丈の長くなることをいうタケルから。ナハは遅ナハルと同じ〔本朝辞源=宇田甘冥〕。タケシ(長)の意から〔国語の語根とその分類=大島正健〕。

いずれの説を探るにしても、やまとことばの合成語と考えて良さそうである。

### ⑲たらふく

動詞の古形「たらふ」(足りる)と、同じく動詞「ふくるる」(膨れる)の合成形。「たら」は、現代においては動詞「足りる」の未然形「足らず」と活用されることはあっても、「たらふ」というふうには活用されないので、共時的にはこの形では語源は見当がつかない。「鮆腹」は当て字である。

#### ④⓪たわわ

動詞「撓む」の語幹「たわ」に、語幹の後半の「わ」が接辞されたものである。「わ」の反復によってオノマトペ的語感が生じ、動詞起源という連想が働きにくくなっている。果物が枝を撓ませるほど多く実っているところから、「枝もたわわに」などの表現ができたと考えられる。

#### ④①てきめん

元来は漢語で「覲面」と表記される。「覲」は「みる」、「面」はそのまま「顔」の意であるから「まのあたり」という意味に繋がっている。かなで表記されることも多いので、かな擬似オノマトペと分類することができる。「効果覲面」という四字熟語でも通用している。

#### ④②つべこべ※

「あべこべ」が指示詞起源であったのに対して「つべこべ」の語源は次のように説明されている（『日本国語大辞典』）。

- 一. ツベツベを強めるために下半を同脚韻語と入れかえたもの。また、スペスペ（滑々）の義か、また、ツベカベの訛か〔上方語源辞典＝前田勇〕。
- 二. 粒瘤の転か〔和訓栞後編・俚言集覽増〕。

第一説に現れる語形「ツベツベ」の語義は「つべこべに同じ」とあり、語源には言及されていない。循環定義のような観を呈しているが、「つべつべ」は反復型としてオノマトペ起源のようを感じられる。もしそうであるとすれば「つべこべ」もオノマトペ語源と定義するのが妥当である。

#### ④③つくづく

動詞「尽くす」の語幹「つく」を反復し、連濁が起きた形である。これも連濁によってオノマトペではないという語源が知られる例である。

#### ④④ちゃきちゃき

本来の漢字音としては「ちゃくちゃく」（嫡々）である。漢語起源であるということは、擬似オノマトペと分類される。2モーラ目の口蓋化は1モーラ目に同化した結果で/ku/が/ki/と変化したものであろう。しかし漢字音の口蓋化音節において、他に同様の例が見られないでの奇異に感じられる。

#### ④⑤うやむや

この語も漢字表記される形が語源で、「有耶無耶」である。元来はあるかないかはっきりしない状態を言っていたが、転じていい加減な様子を表現するようになった。現代語で表現すると「有か無か」というようなところであろう。日常的に、漢字で表記される例は皆無に近いと考えられるところから、かな擬似オノマトペと分類できる。

#### ④⑥わざわざ

副詞「わざと」の「と」を取った形を反復したものである。「わざと」の語源については複

数の説がある<sup>7</sup>が、いずれもオノマトペとは関係ないようである。従って、「わざわざ」もオノマトペとは言えない。

#### ④やにわ

『日本語語源辞典』によると、「矢を射ているその場所に、その庭に」の意味から転じたという。語源からすると、「矢庭」というのは当て字ではないということになる。

#### ⑤やたら

『日本国語大辞典』では、この語の語源は4つほど挙げられている。

- 一. 雅楽の「やたら拍子」から。拍子が早くて調子があわない。
- 二. 弔足の義、またはヤツアタリ（彌當）の類語か〔大言海〕。
- 三. 谷々から薪を切って流すヤタラから〔笈埃隨筆〕。
- 四. 堀切があって往来しにくいヤタ（谷田）をあえて通るところから〔志不可起〕。

いずれも名詞起源であり、オノマトペではないようである。「矢鱈」は当て字である。「やたら滅法」「やたら無性」など、「やたら」の後に意味のある語をつけて強調する言い方もある。

「一見オノマトペのような語感を示すが、語源を辿ると実詞に行き着く」という上記のような語彙は、語源の語彙範疇も意外に広い範囲にわたって分布している。形容動詞や動詞から派生した語が多いということはある程度予想できることであるが、「おいそれ」の「おい」のように感動詞まで含まれているという事実は興味深い。

語源を辿ってみると、反復に当たって形容詞や動詞の語尾が変化したために共時的な語源探求が困難となっている例が見受けられる。形容詞「しぶい」の語幹「しぶ」を反復して「しぶしぶ」となったり、動詞「追う」の連用形「おい」を反復して「おいおい」となるのが一例である。「しぶしぶ」も「おいおい」も副詞であるから、形容詞や動詞からの統語範疇異動に伴って本来の品詞の語尾が消失し、語源が遡及しにくくなつたものであろう。

やまとことば起源のオノマトペでも漢字が当てられる場合がある。「とんちんかん」がそうである。<sup>8</sup> この語は本来鍛冶屋が槌を打つ音を模した擬音語である。3つの音節はそれぞれ槌が地金を打つ音を描写している。槌の調子があつてない様子から、転じて見当はずれであることを指すようになった。「頓珍漢」という字は従って、各音節とは全く無関係の字を当てているのであるが、3つの漢字が相互に関係ありそうに連続しているので、語源を調べてみないと擬音語起源であったということは直観では明らかにならない。

このように日本語においても、当該語彙がオノマトペであるかそうでないかという判定が、専門的に語源を辿ってみないと微妙である場合が存在するのである。

ここで、真の意味でのオノマトペ（仮に「真正オノマトペ」と分類しておく）・境界オノマトペ・擬似オノマトペ・かな擬似オノマトペの関係を整理しておこう。「境界オノマトペ」

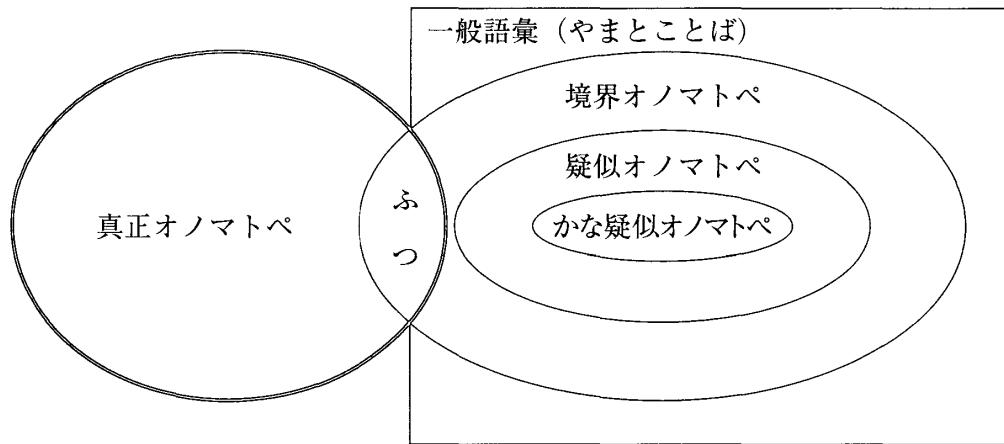
\*7 『日本国語大辞典』では次の3つの語源説を併記している。

- 一. ワレ（我）とザウサ（造作）する意〔私句解〕。
- 二. ワは屈曲して入り込む意。サはサマ〔国語の語根とその分類=大島正健〕。
- 三. ワザのように行なうの意〔国語本義〕。

\*8 「とんちんかん」はKakehi et al.(1996)には収録されていない。語源から言えば真正オノマトペである。

とは、名詞や形容詞・動詞・形容動詞などの「実詞」から派生したものである。観念的に図示すると、これらの語類の相互関係は次のように表すことができる。

(4)



「真正オノマトペ」と「境界オノマトペ」で重なっている部分は、「ふ」「つ」などのように語基そのままの形であったり、規範的な語形から大きく外れているために「オノマトペらしい」響きのする語類である。また「ちょ」という語基は、「ちょっと」という副詞として固定化され、擬態語の範疇から大きく逸脱している。これら少数の例は典型的オノマトペ語形から最も遠くにあるために、「まぜこぜ」「ほのぼの」「はるばる」など一部の一般語彙よりも「オノマトペ的語感」に乏しい、という事実を示している。

ここでは語源に基づいて一般語彙と真正オノマトペを区別した。その基準とは、動詞・形容詞・形容動詞・名詞という実詞に語源を持つ語類を一般語彙と分類し、語の成立当初から擬音語・擬態語であった語彙を「真正オノマトペ」と定義している。一般語彙の下位分類として境界オノマトペ・擬似オノマトペ・かな擬似オノマトペを区分している。これら三者は順に上位区分から下位区分にと並んでいる。

#### 4. 「オノマトペ的語感」の定義

ここまで「オノマトペ的語感」を明確に定義せずにきたが、本節ではこの概念について統語範疇とモーラ数という観点から検討を加える。

まず統語範疇に関して。Kadooka (2002b)、角岡 (2002a) で示したように、日本語オノマトペ語彙には反復形式が多い。Kakehi *et al.* (1996) に収録されている1600余の語彙のうち、半数近くの44%が単純反復形式である。角岡 (2002a) では「オノマトペ標識」として、次のような5つの形態的・音韻的特徴を挙げている。

(5) 反復、「り」<sup>\*9</sup>、Q (促音)、N (撥音)、R (母音の長化)

\*9 「り」は、1モーラ語基に付加される際「い」という音形で実現される。例えば語基「ぐ」に付くと「ぐい」となる。

これら5種のオノマトペ標識のうち、オノマトペ語彙に限って適用されるのは「り」のみである。残り4つのオノマトペ標識（反復、促音、撥音、母音の長化）と同様の形態・音韻現象はオノマトペ以外の一般語彙にも見られる。次に一般語彙における反復語形の例を挙げる。

(6) 反復 名詞：ひとつ、木々、家々

形容詞：くろぐろくろい、しらじらしい、

形容動詞：ほのぼのくほのかだ、はるばるくはるかだ

副詞：とてもとも、ただただ

{ 動詞（疊語）：食べに食べた

{ 動詞（命令）：さあ、買った、買った

感動詞：あれあれ、おやおや、やれやれ

各統語範疇において、反復によって現される意味合いは異なっている。名詞では反復することによって「それぞれの」という意味合いが示される。形容詞では、描写されている様態の度合いが高いことを示している。例えば「くろぐろ」というのは、単に「黒い」というよりも黒さの度合いが高いことを示唆している。これは副詞においても同様である。しかし形容動詞「ほのかだ」－「ほのぼの」においては、「度合いの差」というよりは「語感を和らげる」という機能に長けているように感ぜられるのである。これは「ほのかだ」という語が微妙な程度を表現するという固有事情に由来するのかもしれない。もう一つの形容動詞「はるかだ」の語幹の一部を反復した「はるばる」では、「遠い」という度合いの強調になっているからである。これはこの節で後に検討する「オノマトペ的語感」と関わってくる。

動詞の反復には、少なくとも2種類の機能が認められる。両方に共通するのは「強調」であると言えるが、「何を強調するか」という機能において区別されねばならない。第一は文字通り動作の反復を示唆するもので、「食べに食べた」と言えば「大量に食べた」という事実が含意される。第二は命令あるいは勧誘として相手に動作を促すもので、過去形で発せられる。この用法で反復しない形式は「さあ、買った！」と单発的で、不自然さが残る。

日本語の品詞区分のうち、(6) の如くに反復されない語彙範疇は次の4つである。

(7) 代名詞、接続詞、助詞、助動詞

このうち助詞と助動詞は付属語であって、この語類には反復という形式が本質的に馴染まない。代名詞と接続詞は自立語であるが、(6) に掲げたような反復するについての意味的必然性が認められない。

このように統語範疇別に反復形式を概観してみると、オノマトペと関連が深そうなのは次の語類である。

(8) 形容詞・形容動詞・副詞・感動詞

動詞と名詞は即座に語源を辿ることのできる場合が多いので、オノマトペ的語感は小さいと言える。これら語形が実詞に近いものと、反復によって語源から遠離する(8)との2大区分が

可能であるように思われる。

「オノマトペ的語感」の尺度の一つとして、モーラ数別の頻度数を用いることができる。オノマトペ語彙の派生形は1モーラから8モーラの範囲に分布しているが、モーラごとに度数の分布は大きく偏在している。オノマトペ語基は1モーラまたは2モーラと定義した（角岡(2001a)）ので、反復型を考慮に入れると4モーラまでの語形に収まる場合が多くなるからである。ここではその傾向から帰納して、多くの語が集中するモーラほど「オノマトペ語彙らしく感ぜられる」という尺度として用いよう、という意図である。下の表は、Kakehi *et al.* (1996) の語彙項目を基として筆者が独自に作成したデータベース<sup>10</sup> から作成した分布状況である。全体では1647語となっている。

(9)

モーラ数	1	2	3	4	5	6	7	8
度 数	2	117	547	799	9	146	3	24

大きく偶数と奇数に区分すると3モーラ語彙は例外として、奇数モーラの語彙は少ないと言える。1モーラ語彙は「ふ」「つ」のみであるし、5モーラ・7モーラ語彙も前後の偶数モーラの語彙に比べて極端に少ない。偶数モーラとなる語彙が相対的に多いのは、反復語形と関連している。語基を単純に反復すると、全体の拍数は必然的に偶数となるからである。5モーラと7モーラの語は数が少ないので全例を挙げてみる。

- (10) 5モーラ : aQ-haQ-ha, doN-pisyari, hyoko-hyokoQ, koteN-pan, pin-poRn,  
piR-hyara-ra, piR-hyoro-ro, waQ-haQ-ha, zudeN-doR  
7モーラ : aQ-haQ-haQ-ha, non-ben-darari, suQteN-korori

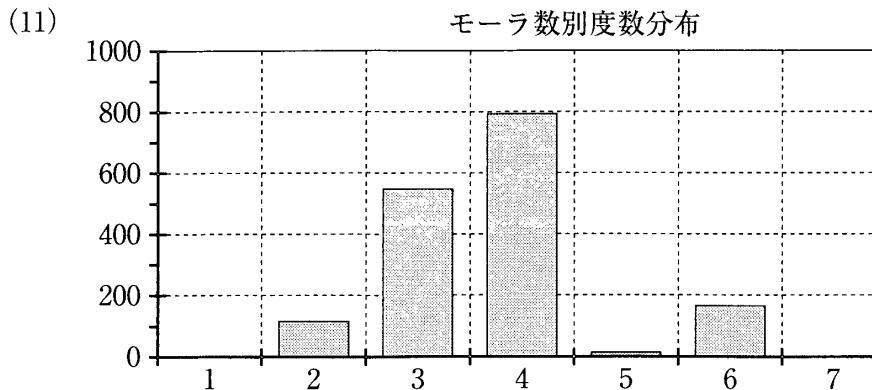
5モーラ語彙のうち、どうしてもこの語形でなければならないのは「こてんぱん」と「ずでんどう」の2語である。この2語に内在する撥音(N)や母音の長化(R)は、強調形を形成するために付加されたのではない。試しにこれらを除いてしまうと\*「こてぱ」\*「こてぱん」\*「ずでどう」\*「ずでど」など非文形が派生されてしまう。他の7語におけるN,R,「り」「ら」「ろ」<sup>11</sup>は強調形、あるいは部分的反復を形成している。従ってこれら（広義の）オノマトペ標識を除いた音形は3／4モーラとなる。7モーラ語彙のうち「のんべんだらり」と「すってんころり」もこの形で固定されていると考えられる。しかしこれら5モーラ・7モーラ語彙が極端に少ないので、このような奇数拍の語形が「不安定であること」を示している。

\*10 補った語彙項目は次のものである。

ku-kuQ, ku-kuRQ, kuQ, kuQ-kuQ, kuQkiri, kuda-kuda, kudo-kudo, kun-kun, kune-kune, kunya-kunya, kunyaQ, kunyari, kura-kura, kuraQ, kuri-kuri, kuriQ, kuru-kuru, kuruN, kuruQ, kururi, kusuN, kusuN-kusuN, kutya-kutya, kutyaQ, kuwaQ, teQkiri, teka-teka, teNya-waNya, ton-tin-kan, tura-tura

\*11 「ら」は笛の音を描写する「ぴいひやらら」において、「ろ」は鳶の鳴き声の擬音語である「ぴいひょろろ」の部分的反復と見なす。反復しない語形はそれぞれ「ぴいひやら」「ぴいひょろ(ひょー)」としてKakehi *et al.* (1996)の見出しどうっている。

モーラ数別分布状況をグラフ化してみると、偏在の様子がよく観察できる。



表とグラフから明らかなように、4モーラ語彙だけで全体の半数近くを占めている。これに3モーラ語彙を加えると81.72%にまで達する。換言すると「3モーラまたは4モーラではない語彙はオノマトペらしくない」ということになる。ここからも、オノマトペ語彙は4モーラまでの長さが規範的であり、5モーラ以上は「不安定である」と言える。

このようにモーラ数という客観的な基準によって、オノマトペ的語感の程度の差を示すことができる。これを敷衍すれば、オノマトペ的語感を数値化することも可能である。例えば、4モーラ語形がオノマトペ語彙の約半数を占めることから、この語形を1とすれば3モーラ語形は0.682、5モーラ語形は0.011というように算出することもできる<sup>\*12</sup>。数値化することの妥当性を含めて、詳細は今後の課題とする。

## 5. 連濁

連濁とは、阻碍音の無声・有声に関わる日本語固有の音韻現象である。ある形態素が、反復または他の形態素との結合によって複合語を形成するとき、無声であった形態素冒頭の阻碍音が有声化されること、または無声摩擦音/h/が無声閉鎖音/p/になることを連濁といふ。

伝統的な日本語学（国語学）の用語では、有声阻碍音は「濁音」と呼ばれている。日本語無声阻碍音音素/p, t, k, s, h/のうち、/p/だけが「半濁音」と定義され、濁音の一種であるとみなされてきた。/p/だけが濁音とみなされているのは、/h/音素の[p]→[f]→[h]という歴史的变化が関係している。連濁を起こす形態素は、オノマトペ以外の本来語と漢語の語彙である。例えば形容詞「くろい」の語幹「くろ」を反復すると「くろぐろ」となり、第三音節の子音で[k]→[g]という有声化が起こっている。ハ行子音は独特で/h/-/b/-/p/という三つの子音が組をなしている。咽頭摩擦音/h/が無標で、有声両唇閉鎖音/b/が有標、無声閉鎖音/p/がさらに有標である。/h/→/p/という連濁には、「ひん」（頻）を反復して「ひんぴん」（頻々）となる例がある。

連濁が起こる条件については従来多くの研究がなされている。連濁についての体系的な研

\*12 これら数値は、4モーラ語形が799例に対して3モーラ語形547、5モーラ語形9という相対値で計算している。

究の嚆矢となったライマンの名に因む「ライマンの法則」は、当該形態素のなかに当初から有声阻碍音が含まれている場合には、連濁が起こらないとしている（屋名池（1991））。例えば、「つじ」（辻）という語を反復してみると、「つじつじ」となって、「\*つじづじ」のように下線部が連濁されることはない。連濁が起こらないのは、との形態素「つじ」 /tuzi/ のなかにすでに有声阻碍音/z/ があったからである。

本論文においては、この連濁という現象が起こる環境を限定して、同一語基の反復と交替形についてのみ考察することにする。環境を限定するのは、オノマトペ語彙に関係した現象として連濁を扱うとすると、反復と交替にさいして連濁が起こる可能性が最も大きくなるからである。すなわち、/CVCV/ という 2 音節の音素配列のオノマトペ形態素において、両方の子音（阻碍音）が無聲音であり、この形態素が反復または交替によって複合語化された結果、反復／交替される部分の語頭の無声阻碍音（第 1 子音）が有声化されるか否かを考察するのである。両方の子音が阻碍音である場合に、両方とも無声でなければならないというのは、一方が有声であれば連濁が起こらないのは自明であるからである。

上述のように、反復あるいは交替形のときの語基の複合によって連濁する場合を内部要因による連濁と考える。内部要因による連濁に対して、接頭辞などの接辞によって連濁するものを「外部要因による連濁」として区別することにする。オノマトペ語彙の外部要因による連濁の例については、この節の最後に述べる。

日本語の語彙において連濁という現象は、オノマトペ以外の語彙では起こるのが無標である。ところが、オノマトペ語彙においては、連濁は原則として起こらない。逆に言うと、反復によって連濁を起こす語はオノマトペとみなさないほうが妥当である場合が多い。そのような語は、形容詞や形容動詞に語源が求められる場合が多いのである。連濁している「ほのぼの」「はるばる」の語源は、それぞれ「ほのかだ」「はるかだ」という形容動詞である。

オノマトペ語彙では連濁が起こらないのは、阻碍音の無声と有声で意味が区別されるからである。例えば「ころころ」に比べて「ごろごろ」は、より大きくて重い物体が転がっている様態が含意されている。反復型語彙では前半と後半で音形が異なることがないので「ころころ」が「\*ころごろ」と片方の子音だけ有声化されるようなことはありえない。無声阻碍音の有声化という音韻現象に関して、一般語彙における連濁とオノマトペにおける無声／有声の意味的対立が相補分布をなしていると考えることができる。この点においても、McCawley (1968) がオノマトペ語彙とやまとことば階層を区分した有意性が確認される。

上述したように、オノマトペ語基は反復／交替しても連濁しないのが規範的である。ところが、Kakehi *et al.* (1996) に収録されている語彙のなかで、連濁が認められる反復形の語が 2 つある。それは「さめざめ」と「ちりぢり」である。ここで、この 2 つの語の語源について論じることにする。

「さめざめ」の語源は『日本国語大辞典』に次のように記されている。

- (12) 一. サメ（小雨）を重ねた〔和訓栞・大言海〕
- 二. サアメ（真雨）の中略サメを重ねた〔俗語考〕
- 三. サメズアの義で、スアの約をザと濁る。なく様子の広がり騒ぐ所を一つに合わせてサメザメという〔国語本義〕
- 四. サはしばしば（数）の反〔名語記〕

第一の説では「小雨」という語自体、「こ」(小) + 「あめ」(雨) という 2 つの形態素が複合語になったさいに、母音の連続を避けるという上古日本語期の習慣によって子音/s/が挿入されて成立した語形である。また『日本語語源辞典』では、「小雨の降るように」という隠喻であったという解釈をしている。

もう 1 つの例「ちりぢり」は、ほぼ同じ意味を表わし、かつ連濁を起こしていない形「ちりぢり」が存在する。連濁を起こしているということは他の品詞に語源を求められるということである。事実、「ちりぢり」は動詞「散る」から派生していると考えられる。2 つの形「ちりぢり」「ちりぢり」を比較すると、次のことが明らかになる。まず、当該語彙が描写する範囲は、「ちりぢり」よりも「ちりぢり」のほうが広い。「ちりぢり」が表現する様態は、Kakehi *et al.* (1996) では次のように定義されている。

- (13) 擬音語：目覚まし時計や鈴の音  
擬態語：毛髪の縮れている様子  
比喩的用法：（精神的に）萎縮する様子

擬音語の語源はこれ以上の検討は不要であろう。擬態語として「毛髪の縮れている」様態は、動詞「ぢれる」との関連が疑われる。動詞「ぢれる」とは「ちりぢり」という語形の方が直接の関連がありそうに思われるが、連濁している「ちりぢり」と、されていない「ちりぢり」の繋がりは不分明である。「ちりぢり」は、当初まとまっていた状態にあった個体が拡散していく様態またはその結果を表現している。この語が表現する様態は、人間などの動物や無生物の物体が起こす動作を描写する。

交替形の語のなかで、後半部分が連濁されている例が 1 つだけ見られる。「てきぱき」の「ぱき」である。「ぱき」は、語基「はき」が連濁されたものと考えるのが妥当であろう。この語基は反復型としては「はきはき」となり、「てきぱき」のように連濁されない。「はき」のように交替形の後半が/h/で始まる語基であっても、「ちらほら」「あたふた」「ちやはや」などは連濁されない。/h/以外の無声阻碍音を持つ交替形語基も連濁の対象とはならない。このことから交替形においても、オノマトペ語彙においては連濁される語のほうが例外である、と言える。

オノマトペ語彙がオノマトペ以外の統語範疇と組合わさって複合語化されるときに、連濁を起こすことがある。Kakehi *et al.* (1996) には収録されていないが「こぢんまり」という語がそうである。この語形においては、「こ」という接頭辞と「ぢんまり」というオノマトペが複合語化されたさいに、「ぢんまり」の語頭の [tʃ] が有声化されて [dʒ] になっている。「ぢんまり」は Kakehi *et al.* (1996, Vol. 1: 199) の定義では「小さく纏まった様態」と説明されている。「こ」というのは、「こぎれい」「こぎたない」というように、オノマトペ以外の語彙に接辞する場合も連濁を起こす接頭辞である。「こぢんまり」は、オノマトペ語彙が連濁を起こす例ではあるが、接頭辞「こ」の接辞という言わば外部要因によるものである。このような形で、外部要因によって連濁されるオノマトペは「こぢんまり」以外に「こざっぱり」「こじっかり」がある。

結論として、オノマトペ語彙では連濁は起こらないものと考えても差し支えないであろう。オノマトペ語彙形式として非常に大きな比率を占めている反復型で連濁が皆無であることか

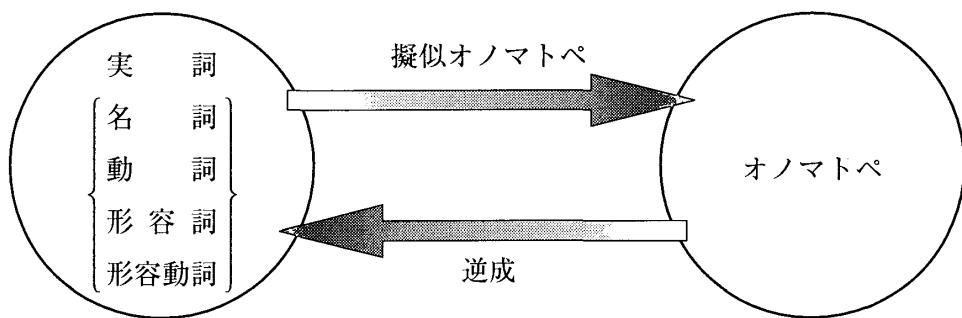
らこの結論を導く。反復形式以外では「てきばき」「こぢんまり」など連濁と見なすべき語例が散見されるが、これらは例外と考える。

## 6. むすび

これまでのオノマトペについての形態的研究では、日本語オノマトペ語彙は固有の語形を示すと指摘されてきた (Kakehi et al. (1996: xx))。このように語形からオノマトペ語彙であるという連想が働くのは共時的な次元においてである。つまり語源を遡及することなしに、形態的特徴などの限定された側面のみに着目している限り日本語オノマトペ語彙は自ずと一般語彙から識別され、「閉じられた系」(角岡 (2003:43))として閉い込むことが可能となった。しかし第3節で「境界オノマトペ」と定義した語類は、字義通り一般語彙とオノマトペ双方の側面を兼ねている。特に「にこにこ」のように、反復語形であることによって典型的なオノマトペと映る語類も、中期・上古期日本語へと起源を辿れば実詞に行き着く例が示された。第3節で列挙したこれら語源は複数説あるが、その妥当性を仔細に検討することは筆者の手に余る。

第3節で、語源が実詞ではなく「純粹に」擬音語・擬態語として造語された語類を「真正オノマトペ」と定義した。この語彙範疇と、Kakehi (1981) 分類による、語彙化の程度において最も高レベルである語類とを対照してみる。実詞と真正オノマトペが相補分布をなしていると仮定すると、次のような図式が成り立つ。

(14)



実詞から、オノマトペに近い語（オノマトペ的語感を持った語）が形成されるのが擬似オノマトペである。例えば形容動詞の語幹「はるか」から「はるばる」が成立するが如きである。逆にオノマトペから実詞となる方向は「逆成」である。オノマトペ「ころころ」から動詞「ころがる」が形成されるのが一例である。

第4節で、モーラ数によってオノマトペ的語感を数値化する方向を示唆した。他の指標も同様に数値化できる可能性が考えられる。同じく第4節で検証した、統語範疇（品詞）もその一つである。オノマトペ語彙に特有の語彙範疇は、特定の品詞に偏在する。オノマトペは修飾成分であることが多いからである。オノマトペ標識も数値化の可能性が大きい。反復が最も多く、他の標識が頻度において差を示すという点においてモーラ数や統語範疇と同様の傾向を示しているからである。このように複数の指標によってそれぞれオノマトペ的語感を算出し、数値を総合してみると興味深い結果が得られるのではないかと考えている。

## 参考文献

- Hamano, Shoko. (1998) *The Sound Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kurosio.
- Herlofsky, William J. (1990) "Translating the Myth: Problems with English and Japanese Imitative Words." in *Linguistic Fiesta: Festschrift for Professor Hisao Kakehi's Sixtieth Birthday*. Tokyo: Kurosio.
- 堀井令以知 (1973) 『日本語語源辞典』東京：東京堂出版。
- Kadooka, Ken-ichi. (1993a) "The Derivation Structure in Japanese Onomatopoeia." in *Proceedings of Kansai Linguistic Society* 13. Kansai Linguistic Society.
- 角岡賢一 (1993b) 「日本語の擬似オノマトペ」覧・田守 (編) (1993) 所収。
- 角岡賢一 (2001a) 「日本語オノマトペ語彙派生過程における語基」『龍谷大学国際センターヤ報』第10巻。
- 角岡賢一 (2001b) 「日本語における『かな疑似オノマトペ』」『龍谷紀要』第22巻第2号。
- 角岡賢一 (2002a) 「日本語オノマトペ語彙の接辞」『龍谷大学国際センターヤ報』第11巻。
- Kadooka, Ken-Ichi. (2002b) "Onomatopoeia Markers in Japanese." in *LACUS FORUM* 28. Linguistic Association of Canada and the United States.
- 角岡賢一 (2003) 「日本語オノマトペ語基の多義性について」『龍谷大学国際センターヤ報』第12巻。
- Kakehi, Hisao. (1981) "The Function and Expressiveness of Japanese Onomatopes." *Bulletin of the Faculty of Letters*, Kobe University.
- 覧壽雄 (1993) 「文学作品に見られるオノマトペ表現の日英対照」覧・田守 (編) (1993) 所収。
- 覧壽雄、田守育啓 (編) (1993) 『オノマトピア』東京：勁草書房。
- Kakehi, Hisao., Lawrence Schourup, and Ikuhiro Tamori. (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 黒田成幸 (1967) 「促音及び撥音について」『言語研究』50。
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- 那須昭夫 (1998) 「強調形オノマトペの韻律構造」関西音韻論研究会における口頭発表。
- 日本大辞典刊行会 (1979) 『日本国語大辞典』東京：小学館。
- 西尾実、他 (編) (1973) 『岩波国語辞典』(第2版) 東京：岩波書店。
- 新村出 (編) (1983) 『広辞苑』(第三版) 東京：岩波書店。
- 田守育啓 (1991) 『日本語オノマトペの研究』神戸：神戸商科大学。
- 田守育啓 (2002) 『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』東京：岩波書店。
- 田守育啓、ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペー形態と意味』東京：くろしお出版。
- Waida, Toshiko. (1984) "English and Japanese Onomatopoeic Structures." in *Bulletin of Osaka Women's University, Studies in English*. Vol. 36.
- 屋名池誠 (1991) 「〈ライマン氏の連濁論〉原論文とその著者について」『百舌鳥国文』11号。大阪女子大学。